BOOK REVIEW

「食料を持たない日本経済」

農林中金総合研究所編

今日の日本経済は、輸出産業を中心とした重化学工業発展がめざましく、これと表裏一体であるのが、不安定で安全性に問題の多い輸入食品に依存した飽食と国内農業の衰退である。

日本農業の起死回生のためには、農業の重要な役割が国民経済的にも政策的にも正当に位置づけされる必要があり、そのためには国民のコンセンサスが大切である。ところが、都市生活者等に対して、農業・農村に関する情報が正確に伝わっていない状況にある。

本書は、農業とは直接かかわりのうすい人達に向けた啓蒙書であり、次の四つの章で構成されている。

第一章　食卓から農業・農村が見えてくる

第二章　農業・農村の変貌と当面する課題

第三章　見えてきた農業・農村活性化の兆し

第四章　都市と農村の「共生」

日本人の食生活は、第二次大戦後の経済成長と国際化によってめざましい変化をとげ、今や飽食の時代を迎えている。第一章では、食卓にみられる食料問題の様相と特徴が述べられ、とくに輸入農産物の増大による異常に低下した日本の食料自給率、不安定な国際食料需給事情。輸入農産物の安全性問題等が取りあげられ、長期的視点からの食料政策や農業・農村再生の重要性が指摘されている。

第二章では、戦後農業の出発点となった農地改革とその後の農業・農政の動向が整理され、次いで稲作をはじめ酪農・畜産・野菜・果樹の各作目部門と山村をめぐる変化の内容と課題について述べられている。ここでは、農業・農村がかかえる問題点が指摘され、全体として危機的状況にある点が示されている。

そうした危機的状況のなかにあって、新しい農業への模索や胎動が始まっている点が注目される。第三章では、農業・農村活性化の先進事例や自発的・内発的な村おこし、非農業者や都市における意欲的な農業振興の取り組みが紹介されている。

最後の第四章では、調和のとれた豊かな社会を実現するための農業・農村の活性化のあり方が論ぜられている。ここで強調されていることは、高度化・成熟化・国際化した今日の飽食の時代にふさわしい新たな農業構築の枠組みとしての農業の多面的な社会的役割およびそれらの役割を達成するうえの多様な担い手の確保、都市と農村との交流や相互理解を前提とする両者の「共生」などである。

本書は、日本の農業・農村がかかえる問題点とその原因、理解すべき課題、新しい発展の萌芽などをまとめた都市生活者向けの一般農業書であるが、農業関係者の学習にも役立つであろう。

危機的状況にある日本の農業・農村の問題点の解明と農業・農村の活性化の方策を探る議論の展開は高く評価されよう。

ただ、「食料を持たない日本経済」に追いこんでいる産業・経済政策や食料・農業政策の欠陥なり、農協をはじめとする農業・農村組織の弱点についての評価が行われていない点が惜しまれる。

（東洋経済新報社発行　一九九三年四月刊　定価一、七〇〇円）

評者
酪農学園大学　農業経済学科
教授　**三田保正**